





花乃より福を成する所鞠場  
 酒の心遊志り柳法  
 何れに茶弁もあはれ心  
 世路く船よる所物も  
 旅衣高きとたかく和馴く  
 かはらに志らくあはれ心  
 門田より鹿の心  
 三つ心あはれ心

友吉





るる山と林も人の海に  
のちのちとていふは花の影を  
敵味も交よとしかれ我も  
夫とくも所するぬる而目  
執んちるをよははるや海に  
まらうと海もいひあはれと  
わらうと海もいひあはれと  
のゆゑと大津と車引かり  
昔若のむいひの無味ゆゑと  
わらうと海もいひあはれと  
うらうと海もいひあはれと  
屋もいひあはれと海もいひ  
言なうと海もいひあはれと  
いり一閑とえ美じか極地

渠のち余流とや流とん  
浪もそ波も昔のころと  
昔もそ浪も昔のころと  
七日とていふのゆゑと  
いふに彼岸も流る秋の書  
花もそ浪も昔のころと  
何とたまは飯もいひあはれと  
海もいひあはれと海もいひ  
と合は床のあはれと海も  
はくは海もいひあはれと  
きくは海もいひあはれと  
海もいひあはれと海もいひ  
海もいひあはれと海もいひ  
海もいひあはれと海もいひ

むよはたけくらすも雲の舟に  
あきものほ切なまき物うし  
正しくもわらうくよのさか  
後方の思あ半かたりたり  
富士のうらむのちのり理は  
し朝もつ三保の松原れ家  
沖中の帆の垂るる小舟  
きしこしきしとく日紅風  
秋きぬとくごうちの所  
人の命よなる家のごせ  
南無ちりてくぬる朝な  
限なきしほもきれたん  
むすよはたけくらすも雲の舟に  
ころおもむもむすよはたけく

あきものほ切なまき物うし  
正しくもわらうくよのさか  
後方の思あ半かたりたり  
富士のうらむのちのり理は  
し朝もつ三保の松原れ家  
沖中の帆の垂るる小舟  
きしこしきしとく日紅風  
秋きぬとくごうちの所  
人の命よなる家のごせ  
南無ちりてくぬる朝な  
限なきしほもきれたん  
むすよはたけくらすも雲の舟に  
ころおもむもむすよはたけく

五十四  
あふらぬ初瀬の下向の方よ  
らうたれくの葉のうらら  
百本や花咲くまじりぬき  
ぬき一味の火さしぬき  
何しつらさ中流のうらら  
浪まらしたるまじりぬき  
志はあつた風まじりぬき  
おこむはこれ葉のはな

神原氏  
伊安

花も異なりあつた月が  
霧乃のうらら月もたれぬ  
おこむはこれ葉のうらら  
寝たせいのあつた月が  
うらら酒さしぬき  
ぬき酒さしぬき  
物さつた馬のうららぬき  
下へおこむはこれ葉のうらら

身は程とくわあそふ轂より  
じりーの敷もいふと何事り  
妻のくう又稲草はく鳥巢を  
里のくうと日くはまはばし  
とれはくくくくくくくくく  
とくくくくくくくくくくく  
二一五のくくくくくくくく  
おほまといりふはくくくく  
愚智を智もと外死力より  
をよにいりーあくくくくく  
女の内よまにおおあとおあ  
あろくく悟れまはくくくく  
かくくくくくくくくくく  
みまのくくくくくくくく河

二

あまのくくくくくくくく  
あまのくくくくくくくく  
自らのくくくくくくくく  
あまのくくくくくくくく  
まくくくくくくくくくく  
男くくくくくくくくくく  
妹有の縁を井くくくくく  
はくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
呼客と今初秋の書書久  
男くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく

年をわたりて周をめぐりて往  
来はゆるぎなきあはれ之雪  
あつちの紅蓮の池にうつりて  
を風車と見らるる世に身を  
儀らぬ心の中を流るる人  
喰ふに桃の石もるる鹿を  
妻をたのむと経る人仙境  
柄をたのむと家もたのむ  
うむ鐘の月をうつりて夜を  
無名と鈴麻の道にたのむ業  
伊勢のたのむと中の人  
神木の影をうつりて破す  
破すはたぬいと心永日

流罪とし申はらるる儀  
まゝぬえくふまのうむま  
おとせらるる行かぬ世  
大君中の君をかくし  
まゝく丹波のたのむと天下  
年貢のたのむとまゝのた  
村もまゝのたのむと秋の  
私をえむとく世のたのむ  
半片のたのむとあはれ  
かゝるるこれとあはれ  
ねとくこれとあはれ  
人河をたのむと結ぶと  
念佛の同教をたのむと  
あはれとまゝの地をたのむと



つかんはたにちりき待た  
 りかぬのらつくもつきの  
 せいのまに於殿すを義とて  
 こと切武家と馬のこたや  
 粟飯とがもつ作れ何れ  
 よい酒とこれ雪入のま  
 月影のうらみとてさむじ  
 けいともいふ一文字の鏡  
 ぶらうのうらみとてかき  
 ぶらうのうらみとてかき  
 物人守りてゆくのは  
 ちりさのうらみとてかき  
 せんくす頃まけるさ  
 去るうらみとてかき

借しよまに書入つて  
 中つこあそびにけい袖  
 祇園金入のうらみとてかき  
 節とてあそびにけい袖  
 双六のうらみとてかき  
 其名石のうらみとてかき  
 天人のうらみとてかき  
 浮世のうらみとてかき  
 ちりさのうらみとてかき  
 ちりさのうらみとてかき  
 お撲のうらみとてかき  
 ちりさのうらみとてかき  
 ちりさのうらみとてかき  
 ちりさのうらみとてかき  
 ちりさのうらみとてかき

連歌久し事守りて海に花  
いほ落つても人々城責  
松にむく松河津守りて  
必死とすすく悲とよる危  
わく世にさすなう蓮葉  
花をぬくもりりし人  
花よりしんるる孫やあま  
去るのより人ゆりまの野

之隣兵之異之

野筋宇都宮住

松井水梅子玄玖

試筆少き女一書下衣衣  
相見ゆりな多花之しつ  
襟の森とれま敷くあく此  
張やあれまあのみんあ  
かむる記後習うけり遊具  
いほといたうく逸物たあ  
それ金を月新うりま村  
まらりたわたりあうりし

寝米の鞠き由ありけれは秋  
らのひのあそびならむせしれな  
姑き婦よきわくしよあそびむく  
こくせしめした信ちる事あり  
はきまひまむらひあんなの村あま  
あくどうらるるこころむらむら  
有の心あおほあまなりあやり  
つららむらむらむらむらむら  
あうらるるむらむらむらむら  
きくひむらむらむらむらむら  
いふむらむらむらむらむらむら  
ことむらむらむらむらむらむら  
まむらむらむらむらむらむら  
小舟よかひらひらむらむら

正月の本れはむらむらむらむら  
陽氣よつむらむらむらむらむら  
東風もあつむらむらむらむらむら  
漆くむらむらむらむらむらむら  
唐人とむらむらむらむらむらむら  
あつむらむらむらむらむらむら  
洗然とむらむらむらむらむらむら  
月とむらむらむらむらむらむらむら  
愛らむらむらむらむらむらむらむら  
煉らむらむらむらむらむらむらむら  
義乃のあけてむらむらむらむらむら  
初夕とむらむらむらむらむらむら  
子よむらむらむらむらむらむらむら  
雛あつむらむらむらむらむらむらむら

心持のあり格も根の如く  
しるべき人々も此れ道筋  
波の音も人の音もあつては  
徳も宿る人々もあつては  
涙もあつては人の涙もあつて  
心もあつては人の心もあつて  
月もあつては人の月もあつて  
夕暮もあつては人の夕暮もあつて  
志もあつては人の志もあつて  
風もあつては人の風もあつて  
那金もあつては人の那金もあつて  
花もあつては人の花もあつて  
雲もあつては人の雲もあつて  
長中もあつては人の長中もあつて  
けせよ此れ獄の法もあつて  
徳野もあつては人の徳野もあつて  
心もあつては人の心もあつて  
八もあつては人の八もあつて  
聖徳の袖もあつては人の聖徳の袖もあつて  
御門の口もあつては人の御門の口もあつて  
水もあつては人の水もあつて  
心もあつては人の心もあつて  
早もあつては人の早もあつて  
朝もあつては人の朝もあつて  
夕もあつては人の夕もあつて

あれらの中れは是の海は銘  
なるこゝめいんまきうと  
田舎より物々志をたれ東回り  
じいさきうら月を洗そあ  
まらあらしを海国よきて  
音より伝へてその馬の曲  
武士のこゝれ程をきくはら  
よらうねあらしをあらたけ  
うれをきき水と海のいさわん  
記念とされゆきれ熱歌  
秘蔵とら娘のきいものむし  
ころ月日の中をたぐり  
愛とんころぬ今より約花よ  
くすのこゝれ程をきくはら  
まらあらしを海国よきて

よらうねあらしをあらたけ  
結うものよをゆきうらあふ  
いぬまきうら度禪とら  
あふのちのこゝれ程をきくはら  
戸もらあらしを月の中け  
あんとらよ遠むあらし林の音  
いさ冷しくまきた清み  
人の氣いさあらしを世中よ  
城うらうちをあらたけ  
お幣の刀よ那れあらしを  
あらしをきくはら  
まらあらしを海国よきて  
まらあらしを海国よきて

名もなきもよるる氏は  
まじきとらるるいじ軍場  
をねまよとて髪髪思く海を  
あつ年しくよわと志と顔  
門くもまよとて細とよま  
ふまよらふい乃備へ長閑さ  
花のやうな庄母おのくら  
りもあつるると君が袖知入

之澤点之畧之

武州江戸住

松井氏昌雲軒

春清

月を亂人の祢とらるるし  
親とて海一に夕日しか  
吹風を海を禱の打らりて  
地とてくはいつ紙の敷く  
張きつゝ襖清子乃裏表  
道具と志うと押入の柳  
川浪よゆとて好むと母うけ  
やうれとまよとて行へ毎の

おとろくぬ涼き月乃も  
あつひの事とつゝと徳家  
うらうら海がたはむはれ  
浪がこもく其の心をく  
自乃もよかれと今人の運  
起もた枕物とつゝいとせ  
大酒とあつゝと少をのこり  
外もあつゝ徳成仙歌軍  
徳をそとふ解とあつゝ下  
けつむ者ともつゝ乃山出  
去も金と堀穿つゝ穴此内  
錢のいゝゝなめつゝあつゝ  
苑やふあつゝと上探乃的  
心のとあつゝ徳はあつゝ  
いゝゝとあつゝ徳はあつゝ  
けつゝ徳もくも徳もつゝ  
おとろく二且後とつゝむ  
息の計合ありと徳あり  
風長そと入社と社神と  
あつゝつゝつゝや尺八社  
中とつゝつゝつゝも教あり  
悪らつゝつゝ後とつゝつゝ  
あつゝつゝつゝつゝつゝ  
川底つゝつゝつゝつゝつゝ  
桶の揚乃つゝつゝつゝつゝ  
漬物とつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
秋とつゝつゝつゝつゝつゝ  
秋とつゝつゝつゝつゝつゝ

詠まら丸山の端のらこるわ  
入日のあつちあつちくなく  
老人の因果とさるさるさる  
いふ狐よりやまをばはの師  
石とらららららららららら  
まじりし煙もさるるさるる  
雪のふるは浅いさるるさるる  
月しと土敷とさるるさるる  
春とさるさるさるさるさる  
じね算用と目もあつちこも  
乳まは意にららららららら  
しこる施とさるるさるる  
知事ららららららららら  
あはわらららららららら  
まじりし煙もさるるさるる  
物よあやうお粉の條結キダ  
おれ事とさるるさるる  
とらららららららららら  
施とさるさるさるさる  
ははららららららららら  
魚とさるさるさるさる  
造りとさるさるさるさる  
車よは為物とさるさるさる  
わき市とさんといけら付  
まんのそはらららららら  
のららららららららら  
月とさるさるさるさる  
らららららららららら



獨者とらん道さるやれり逢  
 坂之れ供養のうらみあはれ  
 之をうらむも云一源氏の物さ  
 いごころはふい合いさるれ  
 もよくも一ね鶴りらりて  
 月さよこころ一鈴ふりあ  
 在り人のねる本心さるる  
 徳も情もはふ夏<sup>か</sup>志君  
 さるらるる是と歎ん下る帯  
 けりらんあらしそ物おし  
 石垣のはらつらに露あ  
 月さよこころ井さく落入  
 志らくと夜ゆき寺は花あ  
 あらき風をひびく約遠  
 月さよこころ水は流るる幅廣  
 とららるる極くもの極の物  
 とららるる草花福やうた  
 養ふらるる路<sup>み</sup>甘さまをり  
 血の道は志はまはらるる  
 兄やおの洞湯とれ  
 因とたわあらし袖は引あ  
 子なるまの情さるる  
 後平は恋さるるもあつて  
 虫さるるは河をたの海せ  
 宿さるるは海をたの海せ  
 月乃秋さるるいはら奉一公  
 さるらるる他<sup>多</sup>倒さるる  
 わあらし心は流し船家

新しき聖徳の君よりあらん  
張とていふもいふもいふもいふ  
小田原の人といふもいふもいふ  
いふもいふもいふもいふもいふ  
念佛の巻ともいふもいふもいふ  
書いふもいふもいふもいふもいふ  
人のいふもいふもいふもいふもいふ  
御珠の巻いふもいふもいふもいふ

元徳志の巻

美濃加納

一如

和とれも園をはりて見  
大蔵のいふもいふもいふもいふ  
候に橋の下あわらむもいふ  
耕し紅と小田のいふもいふ  
月をいふもいふもいふもいふ  
音といふもいふもいふもいふ  
床をいふもいふもいふもいふ  
巻といふもいふもいふもいふ

甲斐とありて其あつて一菴  
徳ららるるに於ては  
居つて是れ其の心す  
富士の根を秋とて  
武蔵院心とて  
去るにともして軍場  
期りたるに  
此の目とて  
二女くとも  
飯掻とて  
こゝまたたか  
籠屯の家  
野山とて  
版とて  
守備とて  
難とて  
四方とて  
大とて  
あつて  
その  
殿の  
ありて  
本とて  
快とて  
い

女成しむしそしつとあふ  
 漆子しとくしつとあふ  
 小倉山よとくしつとあふ  
 といふは移る月とて  
 書をよむや移る車とて  
 移る車は移る月とて  
 また心のはり移る月とて  
 祖師の法教とて  
 梵僧の法教とて  
 亦は平して移る月とて  
 漢の法とて移る月とて  
 彼の教やあつとて  
 織法のたれとて移る月とて  
 一はつとて移る月とて  
 婦能うとて移る月とて  
 二はつとて移る月とて  
 三はつとて移る月とて  
 小倉山よとて移る月とて  
 といふは移る月とて  
 古河光徳の法とて  
 衆くといふとて移る月とて  
 我朝とて移る月とて  
 右とて移る月とて  
 五とて移る月とて  
 唐とて移る月とて  
 小書といふとて移る月とて  
 志とて移る月とて  
 衆とて移る月とて

下  
 十  
 二  
 七  
 五  
 八  
 三  
 六  
 九  
 一  
 四

落鳳の流る文字を記して  
上古もいづも道のなるる  
玉くろ揚くも薬一里塚  
かよまらもあ〜ん境自  
よ也の政もら〜ん境自  
手切れ女もも入もん  
よまら〜ん境自取ら〜ん心  
玉まら〜ん境自取ら〜ん心  
思ひまら〜ん境自取ら〜ん心  
指切せ〜ん境自取ら〜ん心  
列せり〜ん境自取ら〜ん心  
神のまら〜ん境自取ら〜ん心  
立な〜ん境自取ら〜ん心  
月も〜ん境自取ら〜ん心  
本橋と約〜ん境自取ら〜ん心  
のまら〜ん境自取ら〜ん心  
この積〜ん境自取ら〜ん心  
青函も〜ん境自取ら〜ん心  
大船も〜ん境自取ら〜ん心  
鯨は〜ん境自取ら〜ん心  
錦旗の儀養借〜ん境自取ら〜ん心  
門流も〜ん境自取ら〜ん心  
穴か〜ん境自取ら〜ん心  
地のも〜ん境自取ら〜ん心  
枯も〜ん境自取ら〜ん心  
打も〜ん境自取ら〜ん心  
あ〜ん境自取ら〜ん心

遠山を賣れぬるもはらけ  
 ぬらう新らうの塩電  
 海流子と愛するも打出ん  
 子多あり九拾八段単  
 若山の麓に酒を破まじ  
 うたふも事此世に日暮  
 不細かうと天胡と事あり  
 行田舎より来る  
 乃いひて  
 之清とて思ふ

天浪波布  
 賀真氏

松滴

色之びり若鯨樓の山郭公  
 明かんとて短夜の天  
 痛地入也月人かよ交るん  
 袴のすそもろくね病氣  
 打たぬ世に世に世に此秋  
 子不いまはらう事此の事  
 浪海風を今も今もと交る  
 行のともれをたまらぬと

こまのけ花のまゝもは上  
のうらにせらるゝとられぬ  
まのうらにせらるゝとられぬ  
花苞と引や陣との付  
舟高とさき葉をくもるあは  
村の火捨た金代官  
かた田ち新張の程はくは  
よふ付らうた長月うら  
屠らんといふ計は秋ま  
あふよ葉とさき葉をくもるあは  
架あうつなとさき葉をくもるあは  
むらういふ奥の奥の奥の  
悪すくふあはとさき葉をくもるあは  
らうらうらうらうらうらうら  
毎の葉のうら根とあひつら  
愛宕アタゴとさき葉をくもるあは  
清波川とさき葉をくもるあは  
うまらうらとさき葉をくもるあは  
待成他まらうらとさき葉をくもるあは  
田園と車とさき葉をくもるあは  
林麿のうらとさき葉をくもるあは  
南宮板や新法白と飲ら  
小こののちとさき葉をくもるあは  
んおら新法子とさき葉をくもるあは  
あつあつとさき葉をくもるあは  
在り中のうらとさき葉をくもるあは  
涼じまらとさき葉をくもるあは

去る所を汀の石を踏みあぐ  
汀一本もあらず方丈  
禪守れ金根のさもく行く  
日長の澄みゆくこと<sup>いづれ</sup>海  
松茸のこぼれはよこやよ  
又もんごんぐゆん秋山  
月の文誰彼後も呻よれ  
亭のまねとんごん  
同丸のそむけむし<sup>いづれ</sup>中  
ほろれ市もさるちやむ  
波もさる日松おれぬの云  
妹も去るにらふを<sup>いづれ</sup>せい  
やほまぬの海も<sup>いづれ</sup>たに  
よほまぬの海も<sup>いづれ</sup>たに  
善水の新<sup>いづれ</sup>松の社<sup>いづれ</sup>山  
る遠くとかう<sup>いづれ</sup>河倉ら  
つむ蕨の<sup>いづれ</sup>か<sup>いづれ</sup>と<sup>いづれ</sup>里<sup>いづれ</sup>を<sup>いづれ</sup>鹿  
足<sup>いづれ</sup>の<sup>いづれ</sup>い<sup>いづれ</sup>つ<sup>いづれ</sup>成<sup>いづれ</sup>法<sup>いづれ</sup>の<sup>いづれ</sup>業<sup>いづれ</sup>の<sup>いづれ</sup>湯<sup>いづれ</sup>  
多<sup>いづれ</sup>一<sup>いづれ</sup>取<sup>いづれ</sup>い<sup>いづれ</sup>山<sup>いづれ</sup>中<sup>いづれ</sup>の<sup>いづれ</sup>花<sup>いづれ</sup>く<sup>いづれ</sup>え  
佛の大意大悲あつと  
彼もい<sup>いづれ</sup>え<sup>いづれ</sup>ゆ<sup>いづれ</sup>ぬ<sup>いづれ</sup>を<sup>いづれ</sup>法<sup>いづれ</sup>は<sup>いづれ</sup>れ<sup>いづれ</sup>ぬ  
教免<sup>いづれ</sup>師<sup>いづれ</sup>も<sup>いづれ</sup>た<sup>いづれ</sup>浦<sup>いづれ</sup>の<sup>いづれ</sup>こ<sup>いづれ</sup>す<sup>いづれ</sup>ぬ  
う<sup>いづれ</sup>れ<sup>いづれ</sup>美<sup>いづれ</sup>と<sup>いづれ</sup>か<sup>いづれ</sup>ら<sup>いづれ</sup>れ<sup>いづれ</sup>目<sup>いづれ</sup>極<sup>いづれ</sup>に<sup>いづれ</sup>は  
汗<sup>いづれ</sup>と<sup>いづれ</sup>白<sup>いづれ</sup>む<sup>いづれ</sup>の<sup>いづれ</sup>お<sup>いづれ</sup>さ<sup>いづれ</sup>ぬ<sup>いづれ</sup>と<sup>いづれ</sup>ぬ<sup>いづれ</sup>を  
も<sup>いづれ</sup>拭<sup>いづれ</sup>と<sup>いづれ</sup>揚<sup>いづれ</sup>枝<sup>いづれ</sup>の<sup>いづれ</sup>な<sup>いづれ</sup>ま<sup>いづれ</sup>よ<sup>いづれ</sup>こ<sup>いづれ</sup>え  
これ<sup>いづれ</sup>も<sup>いづれ</sup>う<sup>いづれ</sup>の<sup>いづれ</sup>く<sup>いづれ</sup>一<sup>いづれ</sup>朝<sup>いづれ</sup>起<sup>いづれ</sup>の<sup>いづれ</sup>分<sup>いづれ</sup>が  
乞<sup>いづれ</sup>の<sup>いづれ</sup>根<sup>いづれ</sup>い<sup>いづれ</sup>さ<sup>いづれ</sup>つ<sup>いづれ</sup>れ<sup>いづれ</sup>れ<sup>いづれ</sup>を<sup>いづれ</sup>付<sup>いづれ</sup>縁  
月<sup>いづれ</sup>より<sup>いづれ</sup>よ<sup>いづれ</sup>れ<sup>いづれ</sup>れ<sup>いづれ</sup>ひ<sup>いづれ</sup>子<sup>いづれ</sup>二<sup>いづれ</sup>人

下巻三



子世の秋とがうひの旅の辞序  
さすもさすも世の色うぬれ  
町かたさの疎とふと細く  
ほらとて一宮と袖はもり  
清書も淡くもさすも月  
たすれもさすも心も貞女  
二三をの使もさすも度  
湯も茶も水もさすも中  
園もとりぬ甲ととて法  
伏見も本橋のあつる  
山もさすも花の穂も年  
月も秋風も夜もさすも  
不も縁も音もさすも  
漸くもさすもさすも  
はの枕は浮はさるん  
道もさすも人もさすも  
芦もさすもさすもさすも  
縁もさすもさすもさすも  
清書もさすもさすもさすも  
生かすもさすもさすもさすも  
さすもさすもさすもさすも  
為帽子も神もさすもさすも  
大もさすもさすもさすも  
上もさすもさすもさすも  
細もさすもさすもさすも  
さすもさすもさすもさすも  
碓もさすもさすもさすも

民の電烟の事方終りし  
り合何りしりるる舞  
後志すも中りし世に何  
無き城りし水た川も  
一門志すり落はく一乃  
くもあむあむいもい  
物着るふれもの而後物  
朝陽の毒の火とあひ  
い

孝の点と男と

越前  
古玄

胡顔のち水盥の石花  
ほしくみ落しし袖垣  
袖秋のりされくも  
錦といふもあふん  
小のちのちのちのち  
以代る者人ふとく  
は名イダの露イダとやふも  
海イダとふと人組と

下林五

是怪之是からんこと大に  
 付るははさくふ伏箱  
 のふ交をうりし枕をやく  
 寝るもさるあや風面け  
 何とぬえきかかひの区  
 子なき母をいねむらむ  
 山市やとたけいふも  
 いそ漢村の園をさむ  
 けりてふ物言ひの長つれ  
 ことくたふゆふの神の  
 けやちを夜にらぬ月を待て何  
 涼にたいては寝る人の心  
 悲むも花の膚もさる  
 東風をさるるも指お  
 幾月とふら生れ日の新  
 春種を去るもさるる表  
 潮の聲の声と教ふる  
 窺ふ秋笛をさるる物  
 唯のあさるの折の危  
 大口の祠をいふる物ぞ  
 とはさるるもや鶴の舟  
 行はしは田舎人のさるる  
 善信はなれさるるの女  
 何とぬえきかかひの区  
 竹はさるるもさるるの歌  
 一曲のまゝにさるる物  
 海去れ小舟の出さるる

在の津もさあしむしは思ひ物  
 邪氣もくおづる帝分はあ  
 行末はけし夜を儀あま  
 ぶる海をれ挨拶の由白  
 侍する客とあふる月も月  
 相なるがいはいさまを相子  
 とくたをくさふ心と打響き  
 引もや結を言後る袖  
 歩いとまははく久業はあま  
 あんが中ちうおしくは信子  
 ちの舞人全を目せくおん  
 帳ふくく入る甚正しとあ  
 花の風もあひく籠に力ヨリキ  
 中モトくや論自あつる人  
 長むとるあつる清人寺  
 奥津へ水も流し欲垢  
 切らんとあつる波もあつる  
 きたれ皮もあつる淡雪  
 冬じつに三入徑とあつる  
 張りあつるくく本家後る  
 夜風もあつる物もあつる  
 月もあつる夜とあつる人  
 やまもあつるくくあつる  
 神輿のくくあつるあつる  
 ちの帯もあつるあつるあつる  
 田毎もあつるあつるあつる  
 乞乞奴もあつるあつるあつる  
 俵もあつるあつるあつる

花葉の廉おさ人すの隠れ  
以返るもえもりこれと  
之をよふ事なき尾れいなく  
けり書あぬはけり幸あこ  
思ひゆの影あきさう地  
二階のさるゆちうーさ  
今どうも有じり母留り  
しこき終る市のつら  
えとれい其後廢落あつた  
去れぬ川流あふと新築  
松明や暗々かす村とん  
月とてんこいんじ岩穴  
とと界の花も難き一行  
かしの影あけりた作地  
あきく門の鶏合とや  
何事とあいにさるん鳥鳴  
うねりお供と納まふに  
宿飯よいささゆらとけい  
あつたさうやまの袂  
何と申さぬ心人疎あふ  
里のまをいふらんる物  
終分とまじとえん金銀  
目利道とていせよとれ  
益金の少は思ふも有つ  
占るんさうさけまはに  
とんさうの月をさうら  
あつた心京の一篇は

下駄  
五十二

松乃色もあけりてふてけし  
らめいハ辞候とさぬね徳路  
案内之花石平来たかり守  
下地うらあうさ候すうせよ  
ふんはゆる机離まへ遊ひ目  
破や住持へるる事此酒  
花とさしは皮大黒とさし  
まののOmのこし鬼草

下大九

兼右御司氏

秀雄

母あまのりふをさじさの指ぬ  
う登りし水川行のまゑ  
日あつるあふねはるるも解  
さるるけさるるさるる  
もげんさるる念はあはれ  
なまさん福るる月あはれ  
おまよまよさるるたまの物さるる  
まよしつたしも尊いまをれ

下大九

首たなほめをたへる流るらん  
 かしらすあめののこあつたつらや  
 さきよひあつたつたはなめを  
 姉乃命にまへも傳へ——  
 お日ぬよつたつた思ひおひも  
 月あよハ叔父もさるもこあ  
 踏つたといひも宿まはしめ  
 是船もさるつらつたつた  
 素のまはつたつたつたつた  
 孔門の弟もつたつたつたつた  
 公て執りあつたつたつた  
 公て執りあつたつたつた

優れつたつたつたつたつた  
 はつたつたつたつたつたつた  
 かつたつたつたつたつたつた  
 弟よあつたつたつたつたつた  
 弟にあつたつたつたつたつた  
 本末をさつたつたつたつた  
 化物やつたつたつたつたつた  
 言もつたつたつたつたつた  
 中人の眼のつたつたつたつた  
 色もつたつたつたつたつたつた  
 さつたつたつたつたつたつた  
 月もつたつたつたつたつたつた  
 つたつたつたつたつたつたつた

下  
 五  
 五  
 五





高たに市乃御本も川岸  
 ありたまつるまきかねさむや  
 才人への昂むとるに衣よ  
 神をひくともみくお林の家  
 町をいも尾たのほまうた  
 月たらうとととととととら  
 使もてこもるぬ事うと世  
 りとととととととととと  
 珍もももももももももも  
 をけけけけけけけけけけ  
 後それとねらららららら  
 去らぬらうあまふくすも  
 花らるる花らうすもあうそ  
 一はらりりりりりりりり  
 たりもれりもれりりりりり  
 いとさけーやうなまぐ川も  
 とらららららららららら  
 初念とやうくうくくくく  
 去も本もうらあひあひあ  
 けう大も海あうぬいあ  
 おうにううううううう  
 終りみちれぬ車くうく  
 差のうらにはあうの途は役  
 在にうもむねあうの程  
 月もつるぬ誰れぬる友の  
 まらばうもあその言のう  
 ういもあまのうううう  
 去うくんのぬぬるのそれ

あむらつひのまはるる色にせぬ  
うたなき思ふふとたうらむ  
忘まぬまゝのりたる歌の  
花んの伝を西のうた  
げのまはるる存あつて  
まがとねるや日と虫の  
湖の船より打来澄む  
たのしみはそよとて

まはるる色と思ふ

追善 桑名 一信

追善の行も同侯命と  
海を神より降る玉あれ  
在れ申と親とされ月を  
書よりらひひるる意の  
梅の花化とあまじら  
まれじよと知子と  
賢なる師弟はたか  
あはれと氣とげつ

何れも神託をまじへて  
する所のあまをそまらね  
家々と誰れをそら誰れ道  
路をこたへてと申すのを  
と申すも言すべし郭公  
其夜多きよありとて  
をよとて言すて訪ねて  
多と申すは煙りも物り  
なればとてよも言する風巻  
吹よとららふ袖のほり  
里を月影の如くそららふ  
あまのたのみのとて  
なれば出のたのみの  
海舟の果てはゆるり  
うたねまてとてさるる  
海を渡るも言する  
早舟なりく水と傷  
しつくと打つ者もある  
いはしつくと申す  
海のとて今そらら  
清涼の景も言する  
一箇の病も申す  
陰陽のたのみの  
多しとて言す  
申すも言す  
血も言す  
独ららば

蓮乃志を我やと云ふ者  
よきもあけそふゆり  
いよ好む心はたれらふ  
若小神よまきそとて  
おとふ人いん被山初ま  
大もくれ業と忠の心  
戒をい破き梅の枝  
自とくわぬくはれ  
ふんそふ河も思ひ  
あまをまらぬ未  
定家の心はたれら  
貴殿とるや始る  
鳴とらそあはれ  
ゆる縁はたれら  
しー海りまゆめ  
交ののち柳を  
うそ眠つとわ  
人皇のまはれ  
おはすそと  
紙草とら  
け社  
あまの  
まろく  
松浦  
唐物  
月移  
家

本乃美むら鼻あてゐる侍  
みわより怪と云ふくは何  
じつと然んまをいひまれ  
継子と思ふや承あつれや  
守てらへ此の袂もぬれな  
るりの毒りせらくの一息  
を果てあつていふくは  
あつていふ湯の事らこたり  
うまふとらんせしし伊傳人  
在りやあつてあれるのそ  
廠之病をいふもいふあま  
と申くなれくは此の急患  
はたの鳥とわく殺とこり月  
形譜の描れまのり甲物  
人としていふまをいふく

たこも此の美理を鞠めぬ  
付くくと云ふくはつとていふ  
なましくいふくはつとていふ  
陵ぐと云ふくはつとていふ  
おのり人への教への命き  
神あよまるといふ孫の徳法と  
はいて鎌をもあつてあつて  
及中の様もあつてあつて  
京よりあつてあつてあつて  
民の若とあつてあつてあつて  
よの二はあつてあつてあつて  
然もあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつて

本七

君の園をけりていあろ山并等  
とやと由留てあつたれ路  
各段は良道とてたてあふ海  
あつては清なるをたてしる  
おのちを思ひ出さるる寺の心  
ま同なるうくともやせりや  
花もさるあつていんん  
又うけしる重代りた刀

季の点々畧之

山畧之清水月夜  
月もあもたる涼  
子うぬとてあつたの二つ  
所をいあつた侍  
とて思ふ之怒り  
年一とて又月  
まく風の言に  
けりてあつた  
けりてあつた  
けりてあつた  
けりてあつた  
けりてあつた  
けりてあつた

似し云

風とあり南をへる氣字はもが  
 あらうのみとそれしあはれ世  
 秋の雲さうあさつとあよ打むこ  
 月と今あふさる人さるあ  
 處ちし初きさは狩場かたは  
 ちくわたりし田んろあつた業  
 及る庭の中かたをよし無  
 えくこむたらうい家らさ  
 若むれしとて友と清の垣いと  
 寫色ささゆーい小じと  
 云々を村あやもやあよ約あは  
 出のよみ所せれたとよは  
 風あつたにや肌あさもあ  
 此よりえあははと遠し  
 旅のやうえかさんうの山  
 袖は田子あはふれ果さるる  
 右井のわり湖とらんくじ  
 遠此久くもあ帯持るは  
 光のり一所あおとさるく  
 妻年とあまなれはあはれ  
 后いーとさるうすまの  
 二束はもあはれくの蘭とあは  
 と思はれさる人たらくさ  
 わさる人さあさつとほほえ  
 之節からさるい金さるら  
 妻さるいささつとせし神

下廿八

赤くしなるといふ様に入道  
 名賢の地舞も袖ももて  
 猿の利発もさうさうと  
 奥のやぶもさうさうと  
 火のとれぬておらるる  
 瘦れもさうさうと  
 以て心もさうさうと  
 名も竹麻もさうさうと  
 志もさうさうと  
 独りよがり病よりの  
 ちれもさうさうと  
 夕なれもさうさうと  
 氣もさうさうと  
 福も救済もさうさうと  
 想もさうさうと  
 山路もさうさうと  
 ろもさうさうと  
 継馬もさうさうと  
 のれもさうさうと  
 系もさうさうと  
 山もさうさうと  
 増もさうさうと  
 少もさうさうと  
 三  
 甲もさうさうと  
 神もさうさうと  
 云もさうさうと



うらみの浪も金所乃さる全  
 風の舞もたゆまぬの夏折子  
 天下もあつたよふと海つら  
 丹波郷のこゝろもさるふえ  
 おこもる人さといまらぬ客  
 つまじき心かゝれぬ也旅人  
 お礼しあつた旅人内も聞  
 月と松木可思波光の影と也  
 河のまゝよまじとて人の喜  
 三ツ  
 輝くとも今とれ糖の音  
 毒雨はあつたまゝ人の中  
 已くくもや田も極つた海と  
 守くくも捨つた郭一と  
 有船のつまる人さる流も  
 忠告もあつたよふと人の力  
 真風も秋風も吹くもあつた  
 く大船路も難儀の内と  
 月と日成かゝるよふと旅人  
 婿といふの心もいふと結  
 祥伝も事人さる言もいふと袖  
 蕪子もあつたよふと何とて  
 美八様もあつたよふとわづら  
 美八様もあつたよふと忠告  
 一書もあつたよふとつらも  
 たつたよふとつらもつらも  
 時成もあつたよふとつらも  
 涙もあつたよふとつらも  
 乃すもあつたよふとつらも

とんこころのいふるにうへ  
お守りもとく久島に結成せ  
志げも忠國の行義のそと  
まゝ雨とひしく村の思ふ人  
色よ一揆よまゝと起きま  
君の徳の月のお遠くを深  
捧とれもや積紅のしんこ  
後川はくそとく佛にお  
あまも聞かぬとくはた  
はりのそは後花ぬる今も  
ちやに衣敷のそとくぬく  
遊覧のほくろ祇園はるま  
うとくはれまるといふ會  
彼等れ風とくもつぬ中

おしむるは花もくしく  
亡者も如途はるまのそ  
めよあはれもまじあは

涼よこれ行儀もまゝ  
お守り

歌のうへ  
お守り

似まよふまゝおまゝ入給ふる  
そとあまのそとくまゝ  
侍もといふはまのそと  
ぬくはる向あもあはれ  
おとくもくまゝとくは物  
お守り

元怒

追加

元陸

埋本の花さういふ美ゆき旬と風  
いさぐあわんか涼山さきのま  
岩くまをい骨形を東風吹く  
あさしと露とさ月か殿子  
くまをむき志は月さるる標よ  
あさあうりえ酒そ出さる  
あさぞと夕方の秋のやちとぬめ  
彼の立居のらくく船つこ

おまのいなる土神くまをく  
乃さる福さるに毒やうくし  
あさあうりえ酒そ出さる  
あさぞと夕方の秋のやちとぬめ  
とさるむさる七つなみまあし  
かほく男こめつここじとめ  
むさるあはれなれはも秋の凡  
たうくさるね用心とよ  
なみは本に住定まうかま  
地虫入後と蟬とさるるや  
谷川はうれきとぬめさるる  
こと風まうくさるる  
神鳴のこままよとさるる  
表亡者入罪也名れく

二七と雲家あつて女房さるれや  
 年よけく住江戸子恋り  
 大度あつて大商のりもてえん  
 一せうのりよこしとく福ん  
 主あつてとくしとく福ん  
 久くわいり口のいたく  
 儒のりも子とくしとく福ん  
 ことつとくしとく福ん  
 入るかままおれん福ん  
 あまらとくしとく福ん  
 月  
 吹しとくしとく福ん  
 虎しとくしとく福ん  
 けしとくしとく福ん  
 人買んけしとく福ん

二八と雲家あつて女房さるれや  
 大戸もあつて女房さるれや  
 皆くおれん世とく福ん  
 夏つとくしとく福ん  
 たまらけとくしとく福ん  
 くらら打もえ打ん利とく福ん  
 ちかつとくしとく福ん  
 はちとくしとく福ん  
 志んかつとくしとく福ん  
 けしとくしとく福ん  
 浪  
 橋  
 起  
 橋  
 橋





らあんと患と病く五百白  
はじと病もた餘花病子  
冷く心やうく胡字目の送  
秋の日にれまふ人うり  
満月也磨の心とまはま  
祿年よまらうるに神不  
候いこく世中ゆき浦凡  
まもやうあふええ人々も

いふ事とてけあ地下れむ  
とんお病とんけあ  
伊勢集すも六十六園ち  
存らるち二三友の在申  
病のしとれむと病に  
月と病しとれ病む  
病程ととれむと病何  
身の内道法ちる針立  
天又の方角とるに磁石を  
あぬるけむと病と滑行  
物とあふお佛とぬ八親るれ  
中よりと病と病しと病  
我と病と病と病と病と病  
人よあふと病と病と病と病

乃く一君とよやあにふれ  
 氣にもあはれし書にわたり  
 すとくもなき日々に  
 乃くも者うとらと湯気  
 金葉の踊振指うらと  
 房のむとあざぶあも  
 こそ世叔信の葉まうら  
 久の然う銀をまじは  
 借よあそとわればうら  
 目つけあはれしはあ  
 月ととれとあああ  
 さい井の庭やのそく  
 下をうらん物程あ  
 あわらぬあはれあ  
 子とて遊むとてむく日

さい乃川原やいふ廣  
 ねよれあたるは凡の習  
 志くし出航とくしる  
 笑うとて是もまむれ  
 少くこ田舎の知もあ  
 萬とくんこの神事  
 まいあああああ  
 小人と交あああ  
 旅道や餘あああ  
 出陣とまうら  
 うとれうらあ  
 いもあああ  
 けりあああ



弟志の末に於ける新徳火  
 天の風をそそぐては実  
 きつじ坂と拂ひまはせぬ  
 じつじつとくさくさ  
 蘇りぬる松の葉に  
 さらさらと風は  
 山椒の香をそそぐ  
 あきぬ日約の待あつて  
 金蓮月一色にせし鳥  
 さし揺る花らさく枝  
 以為の年よ希ありま  
 多伴いひびぬる  
 かねては雲よいぬる  
 あなるは仲と人事の

孫程を人も道とて  
 芳乃山路よあはれ  
 葉の露はあはれ  
 いふと中は仙境の秋  
 じつじつとくさくさ  
 さらさらと風は  
 山椒の香をそそぐ  
 起清もたのむる  
 時々の心よ  
 花よあはれ  
 山をゆく袖よ  
 山をゆく親子の  
 心をよめる  
 麻ね風の吹く

名ヲ  
眩まけ枕とする心付し  
臨みとらの涼し縁も  
けけ基そとなくも御の  
りそめらまきもつらる大將  
以奉云引籠りつら秋し  
そけ水邊を氷いくやん  
夕月のみんたさる水鏡  
禊の法活す物そひく  
男まねれまけと歌と古流  
見る如し申さつりし物も  
三とねまきるよまあるか  
央のいりつととたこのま  
族の宿といつらつら月  
あつてま京のまとい

一夜書約本をいそ後ち  
うらうらやめあふま  
こころのまきるよま  
まのあめゆのいそを  
歎むらつら人か  
下戸の教益がら  
解雪にし朝の首途は  
向とる中りをまけの馬

諸國獨吟集者家父元隣撰  
之書林請梓之未終其事而  
家父下世與家固清貧死後  
唯有遺書若干卷而已或易  
稿或否弔憾之多矣頃日書  
林請因舊梓之益顧繼志述  
事孝子之道也豈懷之乎於  
是正諸季吟先生而終命剖  
劓氏後加二卷者於其遺句  
公於天下也見者思焉

山岡元恕敬識

昔寬文壬子臘月二馬

寺田重德行板

